



# 東京学芸大学リポジトリ

Tokyo Gakugei University Repository

和光小学校における障害児と通常の子どもの「共同教育」実践の検証：  
卒業生への聞き取り調査による共同教育の評価を中心に

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2008-12-16 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 多田, 奈津子, 高橋, 智 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2309/2083">http://hdl.handle.net/2309/2083</a>

# 和光小学校における障害児と通常の子どもの「共同教育」実践の検証 ——卒業生への聞き取り調査による共同教育の評価を中心に\*——

多田 奈津子\*\*・高橋 智\*\*\*

特別支援科学講座\*\*\*

(2004年10月29日受理)

キーワード：和光小学校，共同教育，障害児，卒業生，聞き取り調査，障害理解，障害児集団

## 1. はじめに

### 1.1 問題の所在

和光小学校で「共同教育」という名のもとに、各学級に1～2名の障害児を受け入れ実践が始まったのは1974年である。1970年代の養護学校教育義務制への動きのなかで、当時の丸木正臣校長から「健常者と障害者とが協力し合うことによって、健常者の教育にもさらなる発展があり、そしてまた障害者にも発達の上にプラスが生まれるような教育を考えたい」という提案がなされた（和光小学校（1991）『共に学び育て子どもたち—健常児と障害児の「共同教育」15年の歩み—』星林社，p.8）。

和光小学校では共同教育を通して育てるべきものとして、「障害児・健常児それぞれの発達」「人間尊重の認識の定着」「民主的人格づくり」を挙げて実践を展開してきた。人間尊重の認識とは、①生命の尊厳・生きることの意味について学び合い確かめ合うこと、②差別のあらわれ・しくみを具体的な事実の上に立って学びあうこと、③障害と障害者を科学的に認識すること、④具体的な接触の中で人間同士の連携を築く上で必要な思想・態度・能力を育て合うことである。また民主的人格づくりでは、能力・学力と人格がそれぞれ別々のものとしてとらえるのではなく、生活を子ども自身が選びながら自分の力によって変えていけるよう

な「生きる力」「自己選択権」を育てていくことを大事な柱としている。

和光小学校の共同教育は、養護学校等の専門的障害児教育機関の存在と役割を認めた上で出発している。したがって和光で受け入れる障害児は通常教育の対象としうる障害児であり、和光小学校の教育課程と発達課題に共通部分を有するものである。共通部分としては言語的・身体的活動を通じて、学級集団と交流をつくり出していける者であり、和光小学校で学んだ場合にその子に意味があると思える子どもを、入学選考により全教員の合意のもとに受け入れている（和光小学校（1985）『共同教育共に育ちあう「共同教育」を求めて—和光小学校の「共同教育」の歩みと実践—』p.14）。

受け入れの基準を次のようにまとめ、公表している（「和光小学校学校案内2003年度版」）。①学校で取り組まれる主要な活動・課題の達成のために担任以外の介助員を必要としない者。②和光小学校の教育課程と発達課題のあいだに共通部分を有すると判断できる者。③身体による活動、言語による活動を通じて、学級集団と交流を作り出していける者。④家庭がその子の障害の事実をしっかりとらえ、学校と一致して働きかけていく姿勢と条件を整えていること。⑤受け入れの人数については学級1～2名までとし、構成される学級集団の状況を考慮してその都度決定する。

\* An Examination on the Practice of Cooperative Education for Children with Disabilities and Regular Children at Wako Primary School; Focus on the Evaluation of Cooperative / Natsuko TADA, Satoru TAKAHASHI

\*\* 埼玉県北川辺町立東小学校（2003年度東京学芸大学特殊教育特別専攻科修了）

\*\*\* 東京学芸大学総合教育科学系特別支援科学講座・連合学校教育学研究科発達支援講座（184-8501 東京都小金井市貫井北町4-1-1）

さて和光小学校では1990年にこれまでの共同教育を総括し、実践上の課題として次の三つを挙げた(和光小学校(1991): pp.35-37)。**①**障害児を含んで全ての子どもが、生きる力や学力を身につけていけるような指導力量、実践力量をいかに高めていくか。**②**子どもに育てている「民主的人格」の検証、すなわち一緒にいるということがどういうことなのかを検証すること。とくに障害・障害児や自分の体について学ぶ学習を進めてきたことの意味は何か、子どもの障害観や障害者理解がどう育っているか。**③**その子の一生をとって見た場合に、健常児と共に学んだことが障害児の障害者としての人格を育てていることにつながっているのか。障害児が障害をもって生きるという理解と、その上で生きていこうとする力をどう育てているか。

和光小学校の共同教育を通して、障害児を含む全ての子どもの学力や人格がどのように育っているのかという検証が課題として挙げられているが、その点については今日においてもなお十分ではなく、とくに共同教育を受けた当事者・障害児からの評価についてはほとんど未検討である。

この当事者・障害児からの視点は、三上・高橋(1995)において課題として挙げているが、卒業生からの評価を検討することは、和光小学校の共同教育実践の意義や課題、体制づくりや教育条件の整備を検討するうえでも重要な資料になると考える。

## 1.2 研究の目的と方法

上述の問題意識から、本稿では和光小学校で共同教育を受けた卒業生へのインタビュー調査を通して、当事者・障害児の視点から和光小学校の共同教育実践の意義と課題を明らかにすることを目的とする。

和光小学校卒業生へのインタビュー調査の視点は以下の2点である。**①**和光小学校の共同教育が障害児とそのクラスメイト両者の発達にどのようにつながっているのか。**②**和光での経験が今の自分にどのような影響を与えているか。この視点にもとづき、インタビュー調査の項目を以下のように設定した。

### 〔障害のある卒業生向け〕

1. 和光小学校に入学した経緯、和光小学校での在校期間、現在についてなど。
2. 和光小学校での教育を振り返り、障害の有無にかかわらず共に生活し、勉強するという和光小学校での経験をどのように思われているか。
3. 和光小学校で学ぶということについて、どのような点を評価するか。また改善すべき点はどのような

ことか。

4. 学校生活のなかで思い出に残るエピソード等。またそのような経験は、今の自分にどのような影響を与えていると思うか(進路・就職を考える上での影響、価値観や生き方などに影響していること、障害についての考え方等)。
5. 和光小学校での「自分のからだ」「病気・障害」「命や生と死」の授業で学んだことや印象に残っている授業はどのようなことか。また「自分を理解する」「他者を理解・受容する」ということにおいて、大きな影響をうけた経験はあるか。

### 〔障害のない卒業生向け〕

1. 和光小学校に入学した経緯、和光小学校での在校期間、現在についてなど。
2. 和光小学校での教育を振り返り、障害のあるクラスメイトと共に生活し、勉強するという和光小学校での経験をどのように思われるか。
3. 和光小学校で障害のあるクラスメイトと学ぶということについて、どのような点を評価するか。また改善すべき点はどのようなことか。
4. 障害のあるクラスメイトと一緒に学校生活を過すなかで、思い出に残るエピソード等。またそのような経験は、今の自分にとってどのような影響を与えていると思うか(進路・就職を考える上での影響、今の価値観や生き方などに影響していること、障害についての考え方等)。
5. 和光小学校での「自分のからだ」「病気・障害」「命や生と死」の授業で学んだことや印象に残っている授業はどのようなことか。また「自分を理解する」「他者を理解・受容する」ということにおいて、大きな影響をうけた経験はあるか。

インタビュー調査は和光小学校卒業生の9名に実施したが、調査対象者9名の概要は表1の通りである。A, B, C, Dの4名はともに1976年度入学, E, F, G, Hの4名ともに1979年度入学で同学年である。Iは1978年度入学。9名中6名は面接, 2名は電話による聞き取り, 1名は電子メールでの調査を行った。インタビュー内容は本人の了解を得てテープレコーダー等に記録し, それにもとづいて内容分析を行う。

表1 調査対象者の概要

	調査対象者	年齢	障害の有無	備考（経歴／現在の職業）
1	A	34	無	和光幼・小卒業／中学校特殊学級担任教師
2	B	34	脳性麻痺	和光小・中・高・大卒業／会社勤務
3	C	34	無	和光小卒業／障害者福祉施設職員
4	D	34	無	和光幼・小卒業／私立高校音楽教師
5	E	32	ダウン症	和光幼・小・中卒業／民間福祉作業所勤務
6	F	32	全盲	和光幼・小・中・高卒業／点字図書館職員
7	G	31	無	和光幼・小・中・高・大卒業／会社勤務
8	H	31	無	和光幼・小卒業／私立高校体育教師
9	I	32	脳性麻痺	和光小卒業／私立大学在学中

## 2. Aさんの聞き取り調査結果

(1) 対象者：Aさん，34歳女性。和光幼稚園・和光小学校卒業，その後は公立中学校へ進む。現在は中学校特殊学級担任教師である。

(2) 調査日時：2003年11月26日（水）午後3時～6時

(3) 調査場所：Aさんの勤務先の中学校にて

(4) 調査内容：

①和光小学校での教育を振り返り，障害のあるクラスメイトと共に生活し勉強するという経験を今のように思われますか—『共に学び育て子どもたち』の同級生のことが書かれている文章を読む「体育では、みんなと同じにはできないので、彼なりの課題を与えて取り組ませました」

こういうところまでは気づいてなかった。「彼なりの課題を与えて取り組ませていました」って、私運動する時は夢中になって自分の事しか考えてなかったから。結構運動に力を入れているのです。だから和光で体育大学に行くまでの基本をつくられたと思っています。運動嫌いだった子は、和光嫌いという子も多いのです。例えば小学校1年のときにドル平泳法で、ほとんどの人が200mを泳ぎきるのです。ドル平っていう簡単な泳ぎですけど、200m泳ぐのは結構大変です。だから人のことはわかってなかったですね。Bが違う課題を与えられていたことは、今はじめて知りました。

友人が「障害に甘えるな」と先生に怒られたことが印象に残っている。障害のある子に対しては、逆にそういう意味では厳しかったと思います。優しくというのはなかったですし、普段はみんなと一緒に同じに扱っていたと思います。もしかしたら先生の方でフォロー—というか、さっきも読んだら違う課題がずっと与えられていたり、困らないような手立てがなされていたとは思うのですけど。それがこちらにはわからないうちにやられていたのかわからないですけど、特別扱い

されているとは思わなかったですね。

—学習面ではどうであったのかを覚えておられますか  
Bはどうだったのか正直わからないです。みんなは、わからないことがいけないことだとは思っていない。むしろわからないことはクラス全員の問題となる。勉強はみんなでするっていうのは全員が思っているから、障害があるからどうのっていうことじゃないわけです。障害があろうとなかろうと、わからない子はわからなくて、そのことが問題に取り上げられるわけだから。普通心配されるような、障害があって一人おいていかれてしまうということはない。勉強はみんなでするものって思っているから。

—そのような教育を受けて、その後の進学・就職の時には

そうですね、それは必ずあるのですね。障害のある子だけじゃなくて、私が公立中学校に入ったときショックだったように、和光を卒業したら社会はなんて冷たいというギャップがあるのですよね。やっぱり守られている—というか、温室といわれるのも一応あるのですけど。でも逆に、みんな一度落ち込んで上がっていくっていうのもありますね。同窓会で会うと必ず話題に出るのが、和光を出ると「世の中が冷たい」と言って必ず落ち込むって—ということですね。それだけ先生に守られているし、クラスの中はあたたかいし。

②障害のあるクラスメイトと学ぶということについて、どのような点を評価されますか。また改善すべき点はどのようなことでしょうか

障害があるって—ということをそんなに意識せずに生活しましたね。障害があるから—という教育ではなかったですね。優しくしてあげよう—というコメントは絶対ないし、ほんとうに自然な形で一緒にいたと思う。

だけでも自分とちょっと違う人がクラスに一人、二人いるわけだから、気を遣わなくてはいけないというのは自然に出たのではないかな。意図的にというのではなかった。

評価したいことは、それが普通だということですね。ノーマライゼーションの考え方が根本的なところにあるのでしょうかね。一緒にいて違和感がないというか、同じクラスの仲間なのだという意識がすごく強いですよね。問題と思うことは、お金のある家庭の子どもしかその学校に入っていないのです。お金持ちで条件の整った家の子どもしかいないのだから、やっぱりすごく狭い世界だと思う。片親とか生活保護を受けている人は和光にはいないわけです。社会はもっと厳しいのに。

**③障害のあるクラスメイトと一緒に学校生活を過ごすなかで、思い出に残るエピソード等がございましたら教えてください。またそのような経験は、今のご自身にどのような影響を与えていると思われますか**

西口先生の授業で一番印象に残っているのは、おじいさんのトランクという話だったかな。戦争の話だったのですが、今でも鮮明に覚えています。授業でK君が読み始めたら、読んでいる途中で、その内容につまって泣き出してしまったのです。そしたら先生も一緒に泣き出したのです。授業はそのままずっと二人が泣いていて、そのままシーンとしたままチャイムがなって。だから何にも授業は受けてないのですが、でもその教室の空気が張り詰めていて、二人が泣いていたことは今でも覚えています。そういう授業が結構ありました。和光のことはとても鮮明に覚えているし、その経験は教師である今の自分の土台になっています。授業づくりなどの面でも。

**—教師になろうと思われたきっかけは何でしょうか**  
学校が好き。あとは体育が好きで、おしゃべりが好きで、人が好きだから、これしかないと思いますね。学校が好きっていうのはやっぱり和光が大きいです。

**④「自分のからだ」「病気・障害」「命や生と死」の授業で学んだことや印象に残っているのはどのようなことでしょうか。また「自分を理解する」「他者を理解・受容する」ということにおいて影響を受けたというような経験はありますか**

自分のからだという勉強をしたのかな、よく覚えていないです。命はね、5・6年のヒロシマの平和学習が心には刻まれています。平和学習をしている時に、被爆者で吃音があつてうまくしゃべれない方で、その

方のお話を聴いているときに、吃音を笑った子どもがいたのです。それで反省会のときに笑った人がいるって、その人が思いを伝えてくれたのに、そんなのはいけないって話し合いになって、笑ってしまった人たちが泣いて反省したというのがありました。

和光の校歌の歌いだしの「若者が願いを込めて一粒の種をまく」というように、この一粒の種が育っていく、ずっと和光に育てられているのだなというのがすごくありますね。私のころは丸木先生が校長先生だったから、丸木先生の話をはひひしと聴いていましたね。

自分の理解というのはあまり意識していなかったです。ただ他人のことに限っては、担任の先生が「今度は人に優しくしてあげるのではなく、優しい友達を見つけてください。優しさは力なり」って卒業アルバム書いてくれたのですよ。それくらい人のことを考えていました。自分を理解するのは、私は他者の方が先でした。中学にいったから自分について深く考えました。自己確立のことを中学にかなり深く考えましたね、反抗期もすごくあったし。その根本は、やはり和光での考える力とか、生きる力というか、大きいですね。

### 3. Bさんの聞き取り調査結果

- (1) 対象者：Bさん、34歳男性。和光小学校・和光中学校・和光高校・和光大学卒業。現在は会社勤務。脳性麻痺による両上肢機能障害（困難）・移動機能障害（制約）、障害者手帳2級。
- (2) 調査日時：2003年12月6日（土）午後2時30分～5時30分
- (3) 調査場所：川崎市
- (4) 調査内容：

#### ①和光小学校に入学した経緯についてお伺いします

幼稚園は公立に通っていた。小学校への就学時検診を受け、公立小学校入学の通知をもらったのだが、作業や学習面などの問題を親が危惧して和光を選んだ。また和光大学の篠原教授のもとへも親が相談に行き、そこではやはり和光は限られた環境であるから、そこで育つと外に出た時に大変なので和光に入れるよりも地域の学校へ通った方がいいのではというアドバイスをもらったが、考えた末に和光への入学を決めた。そのような話は共同教育のかかえる問題ではないが、とくに和光ではよくきくこと。和光の共同教育は、親が本などで調べた。

**—和光の共同教育について、在学中にご存知でしたか**  
子どもだからそんなには意識してないし、やはり自

分の障害児という認識もまだあやふやだった。養護学校があり、養護学校に入る障害児もいるというのは聞いて知っていた。でも実際にそういう人に会ったことはなかったため、先生と子どもがマンツーマンの小さい形の学校で、どうやって遊ぶのかなということを考えたことくらい。中学くらいに、大人になるためにはある程度の学習が必要だと思うのだが、その時にあるレベルにまでいかなかったらいいというように「その人に合わせられるということは怖いかもしれないな」というようなことを考えたことを覚えている。

## ②和光小学校での教育を振り返り、今どのように思われますか

### 一学習面について

和光では障害のあるなしにかかわらず、分からない人の意見に戻って、もう一度みんなで考えていく学習を大切にしていた。同じ年代にもう一人障害のある友達Kがいて、その人は秀才で学習面では遅れがなくてむしろもっと勉強を早く進めたくて、周りの友人のことをこんなやつらと一緒にやりたくないってけなしたことがあった。そういう意味でKにしてみれば、なんでもできるほうはいつも置き去りなのだっていうジレンマが多分あったのだと思う。

小学校のとき親と先生が、ワープロの前の機器であった和文タイプを教室におくということについても一生懸命に研究していました。中学の終わりくらいに東芝のルポというワープロが出て、学校でなぐり書きしたものを、家でワープロで打つことを飽きるまで試みていました。やっぱりノートに書くという作業は問題になります。とくに高学年になると書いて覚えませんが、それができないのは絶対的なハンディだと思う。

### 一（親と担任のやりとりのノートを見ながら）

これを読むと、学習の遅れの問題について親とやりとりしているのですね。これを読んでいてショックですね、学習遅滞とはいわないけど、理解することが遅かったり、やる気がなかったりっていうように、親と教師の苦労が綴ってあるのです。

### 一生活面について

学習については時間がかかり、また生活においても作業の遅さを補うために適当に端折っていくことが多くて、学校の教材とかプリントをファイルにしないで適当にランドセルにぶち込んでおくということをやっていた。整理などはようやく中学になってから始まっ

て、小学校ではよくものをなくした記憶がある。そのため先生や親に怒られるのを避けるために、よく嘘をつくようなことはあったが、でもそれは人とコミュニケーションとるのが好きになっていく過程ではあると思う。

### 一演劇活動について

中学校の時、自分たちの問題を語ったり、共同作業のゲームをするなかで自分たちの問題を出して芝居をするプログラムに参加してやみつきになり、高校・大学と養成所にも行ったりして芝居をしていた。現在も土日は路上演劇を、友人や先輩と一緒にやったりしている。そういうことを知ったのも和光でのことだった。

## ③和光小学校において障害の有無にかかわらずともに学ぶということについて、どのような点を評価されますか。また改善すべき点はどのようなことでしょうか。

### 一評価する点

小学校から大学まで、学び遊べる環境を与えてもらったこと。しかし6歳児の入学時には共同教育の効果が多面的に有効と判断されたが、6年後も引き続き有効であるとは限らない。和光中に進学できない12歳児のケースの場合（割合としては多いはずだと思う）、結果として共同教育で学校教育が始まり特殊教育にシフトしていくことになる。

ある意味では、素直になれるよね、ああいう学校ってたぶん。障害があるからって卑屈に思ったりはしないっていうのは、和光の教育のおかげなのかもしれないと思う。大人たちはみんな自分が死にたいと思ったときは一回くらいあったというが、でも僕はそういう経験は思い起こしてもない。思い起こしてみると、そこまで追い詰められるっていうことが子どものときなかった。そういう部分において、和光という限られた中で育ってきたことによる、そういうネガティブなこと考えられないという子が和光には多いのではないかなと思う。

### 一改善すべき点

高校までの和光の障害者に対する姿勢っていうのは、時間をかけてでもみんなと一緒に、同じプロセスを確実にやるということだと思う。しかし大学は高校までとは全然違う。社会的なポジションのつくりかたというのが大学になると入ってくる。そうすると自分の要求を人にどのように伝えていくのかということが問題になってくる。基礎学力という問題。親を見ていると基礎学力をやはりものすごく気にしている。それは和

光そのものの課題だよ。基礎学力がないのは障害児だけじゃなくて、みんなも問題。

④一緒に学校生活を過すなかで、思い出に残るエピソード等がございましたら教えてください。またそのような経験は、今のご自身にどのような影響を与えていると思われませんか

#### —自分の障害者としての認識

新宿の職業訓練センターに通ったときに、初めて障害者の集団に入ったのですが、えらく面白かったです。いい話とか聞けて、本当に面白かったです。脳溢血で片麻痺の4歳のオヤジさんがいて、奥さんと子ども3人いるために働かなくてはということで職業訓練に来ていたのだけど、その最中に4人目の子どもができたのを知ること。すごく悩むのだけれども、奥さんが生もうよって、子どもが多いとちょっと家族が明るくなるじゃないのといつて。しかし障害を受けて失業中で、自分にも自信がなくなっているわけですよ。でもやっぱり家族が明るくなるじゃないって奥さんに言われるとがんばろうって思うのだから、僕みたいな若造に昼休みに話しに来るのです。そういうことってやっぱり和光のなかでは体験できないよね。こういうのって、すごい話だと思う。なんでそういうふうになるかという、自分が障害者であるということ、どのように意識したのかについてはっきりしないという、謎という、そこが一番の問題でもあるからです。

⑤「自分のからだ」「病気・障害」「命や生と死」の授業で学んだことや印象に残っているのはどのようなことでしょうか。また「自分を理解する」「他者を理解・受容する」ということにおいて影響を受けたというような経験はありますか

#### —自分の言語障害を意識した時

学校を離れたところで僕は言語障害の問題に直面した。学校ではそういうことはなかった。つまり小学校1年からずっと6年間いるわけだから、そのへんは相手方に聞かなければどうかわからないけども、たぶん早い段階でコミュニケーションをとれるようになっていた。わりと和光の子ってコミュニケーションがとれているでしょ。ダウン症の子をみている、普通に子ども同士のコミュニケーションがとれているのだから。先生の方が子どもについていけないという。遊びの中で徹底的にコミュニケーションがとれるからね。

#### —平和学習、差別問題

ヒロシマの平和教育も小学校段階では、ちょっと疑

問もあるんだよね。公平にみることができなくなってしまふようなことがあると思うんだ。こういう風に考えている人はとってもやさしい人だとか、こういう風に考える人はおかしいというのを、子どもの時に感じすぎていたのかもしれない。平和教育から差別問題をテーマにするってよく書いてあるけれども、整理できないのではないかな、小学生では。また民主的なクラスを運営していこうというのはいいけど、発展段階の子どもたちの現象を捉えて、それは差別だよって差別ってものを具現化してそこを攻撃するってのは…。もうすこし考えてみる努力をしてみようというようなアプローチがあってもいいと思う。でも総体的にはいい学校だと思う。和光に入らなかつたら、大学でいろいろな経験をしようとは思わなかつたしね。

#### 4. Cさんの聞き取り調査結果

- (1) 対象者：Cさん、34歳男性。公立小学校から2年生3学期に和光小学校に編入し卒業。その後は公立中学校へ進む。現在の職業は障害者福祉施設職員。
- (2) 調査日時：2003年12月10日（水）午後6時～8時30分
- (3) 調査場所：Cさんの勤務先
- (4) 調査内容

##### ①和光小学校に編入して

#### —公立から和光に入ったときの違いについて

公立から和光に入った時よりも、逆に和光を卒業してから公立の中学にまた戻った時のギャップがものすごく大きかったですね。公立には特殊学級もなく、同じクラスにも障害児はいなかったです。和光では、障害のある子が一緒にいることが自然にそういうものなのだろうという、とくに考えることはしませんでしたね。

#### —和光の在学中に共同教育についてご存知でしたか

わからないですね。そういう言葉も知らないし。障害のある友人がいたけれども、いるのが普通だと思っていたので、とくに違和感があったというわけではないけれど、なんとなく自分にはそういう人と関わりたいていうのはありました。和光に入ってからね。和光の共同教育については、いま初めて知りました。

②和光小学校での教育を振り返り、障害のあるクラスメイトと共に生活し勉強するという経験を今どのように思われますか

差別しないことだろうね。そういうふうにするなら

自分が受け入れられたってことは、特別視してないから。この人は障害があるからこうなのだというのではなくて、普通に扱って普通にやらせて、どうしてもできない場合、例えば運動会で走るときにBはここからスタートするというのも普通に思っていた。劇でも主役をBにやらせるし、それも普通っていう感じで。

3年生のときの劇の会で、Bと私のやりたい役が重なり、私が折れたのですね。それからBとかかわりだし、ずっと今でも付き合うくらいに仲良くしている。Bの芝居は卒業してからも見に行ったりしていた。あの演劇サークルは、彼にとってよかったのではないかな。いろんな人と出会い、触れ合い、いろいろ勉強になったであろうし、一つのものに向かっていくのはすごくいいから。私の友達のなかでは、Bは考えが一番しっかりしているというか、視点が違うことが多いね。

目の見えない子がいれば誰かが手を引くのが当たり前っていう、本当にそういうことができている学校だった。それも誰さんやりなさいっていうのではなく、自然に出てくるっていうことであって。なんであんなことができているのか、今思うとすごいことと思うけども、在籍していたときにはそれがすごいことだと特別なことだとかという意識はなかったですね。

和光のよさってというのは、意見を何でも出し合えるところ。だから障害のある子でもない子でも何でも好きなこと言うし。先生が子どもたちの意見を引き出すよね。それが一番強い学校かなって思う。だから逆に中学校でのギャップ、みんなは何にも言わないで抑えることを学んできていて、俺は抑えることを学ばないで、好きなことを思ったように表現するっていう教育で育ってきて、中学のときにあいつは生意気だということになって、1年生のときにいじめっぽくやられちゃったんだよね。何がおかしいのだろうといつも思っていたのだ。中学2年になって、そうか言いたいこと半分にしなきゃならないのだということにやっと気づいた。和光から普通の教育にスライドするのに1年かかった。そういう教育が、和光の大きな特徴かなって思います。障害のある人も自由に意見を言い、そういうのをみんな汲むわけで、ディスカッションのなかでそれが自然になるのじゃない。普通の学校だと「〇〇ちゃんはこれができないのだからやってあげなきゃ」っていうレベルにまで達せればいい方で、和光はそこが違うと思う。

あとは障害に甘えさせないよね。普通の学校だったら、お前はこれしかできないからこれでいいよとか、ここまで頑張れたのだからこれでいいよというような指導をするかもしれないけど、そういうのは和光には

ないから。とにかくできる限界までやらせるという感じはある。たとえば山登りだと、Bがみなと同じルートでとにかく登れるところまで行こうというやり方で行う。それに職員が1人とか2人とかついてね、早めに出発したりするけども、いけるところまで行って帰ってくるっていうのはあるよね。そういえば思い出した。誰かがBに「おまえ障害に甘えるな」って言っていたな。そういう教育だよ、それが全て。

#### 一甘えるなっていうのは、障害のある人にとっては どうなのでしょう

あの頃は、Bがナヨナヨしていたときだったのだよ。喝を入れられたのだね。それを機に変わっていったし、それでいいってたらそこまでしか伸びないもの。みんなもBの視点に合わせるけども、逆に言うとBもみんなに合わせなくてはならないっていうことがあって成り立つのかもしれないよ。同じことをやれるようなときには、やらせることが原則・基本じゃない。どうしても身体的原因でできないことがあるのならば、特別なことをとすることはあるかもしれない。

#### 一障害のある子は学習についていっていましたが

身体障害なら誰かがフォローすればなんとかなるけど、知的障害は難しいよね。今仕事していても思うのだけど、知的障害のきつところは、理解力の乏しさっていう表面的なことしか理解できなくて、深く物事を観察できないというところ。実際問題として、できないで周りに迷惑をかけたりすることはやっぱりあるし、本人もある程度の知的能力がある人は、分かったようにごまかすしかないのですね。普通の人と一緒にいると、常に背伸びしなきゃならない。とくに小学校では身体障害は理解しやすいけど、知的障害を理解するのはなかなかしにくいから、「あいつはばかだ」ということになってしまうのではないかな。

#### ③障害のあるクラスメイトと学ぶということについて、 どのような点を評価されますか。また改善すべき点は どのようなことでしょうか

##### 一先生の障害のある子に対する理解や態度、配慮について

やはりよく理解していたのでは。障害に甘えるのではないって言葉から考えると。とにかく普通の子として扱うようにしていたのではないかな。それは基本だと思うけど。できないところだけは別の課題を与えてということはあるけど。

### 一友達同士のかかりについて

みんな仲良くやっていたし、特別視していなかった。ただ2学年下のBよりも障害の重い子とよく出かけたりにしていたのだけれど、そういう時は、ちょっと手を引くようにしたり、事故にあわないようにとかいう配慮を普通にしていたという感じ。でも別にその子がどうのってことも思わなかった。障害によるいじめもなかったと思う。

### 一改善すべき点

ないかな。ただ和光でそのまま中・高・大といったときに、世間を知らないで育っちゃって修正するのが大変。もしずっと和光でいくのだとしたら、そのへんを一度振り返るといふか、他の学校ではこういうことはないというのを。世渡り下手であるかもしれないね、和光の子は。

④障害のあるクラスメイトと一緒に学校生活を過ごすなかで、思い出に残るエピソード等がございましたら教えてください。またそのような経験は、今のご自身にどのような影響を与えていると思われますか

一和光での経験が今の自分にどういふ影響を与えているか

障害者福祉を選んだっていうのも、はじめはその辺からじゃないかな。障害者がいて当たり前で、けどこの世の中で当たり前になってなくて、そういう世界を何とかしたいなっていうのがあって。専門学校のときに精神病院にたまたま実習でいったのだよね。触れ合うまでは、精神病院だから…という感覚でいたわけなのだけれど、触れ合ってみたら「ええっ、全然普通じゃん、なんで」というのが大きくて。これはもうおかし、世の中の常識とずれている、それでこの世界に進んでみたいなって思ったのだけれど、その根底にはやはり障害のある人とない人の差はなくすべきといふか、ないのが当たり前というのが、この和光の教育で培われたんじゃないのかなと思うけどね。

### 一価値観に影響していること

障害のある人もない人も普通にいるのが普通の社会っていう、ノーマライゼーションっていう言葉を知らなくて、自然にやれているのが和光ではないかな。それが自然に身につけているから、今も障害者福祉で生きているのではないかな。

職場でどうしてもメンバー（利用者）さんを下に見てしまうスタッフがいる、それはやめてくれと散々言っているのだけれどなおらない。職員同士で話す言葉

とメンバーさんと話す言葉が違うだもの。同じ対等な人間だということは一番大事なことだと思うのね、こういう仕事にしても、何にしても。それが一番ですよ。

### 一和光の教育が障害のある子に与える影響について (障害があるからといって卑屈に思わないという友人Bのコメントに関連して)

和光の教育は大きいよね。障害者だからどうのっていうのがなかったから、卑屈にならないっていうのはあるのではないかな。でも養護学校を全部否定してはいけなよね。専門教育がそろっているわけで、大事な学校ですよ。一般の学校になじめる障害のレベルと、そうではないレベルの人があるのですよ。そうではないレベルの人が入ってしまうと、お互いが苦労しちゃうかもしれないよね。周りももちろんだけれど、本人も合わせよう合わせようと苦労してしまうかもしれない。それは逆に障害のある本人にとってかわいそうなことかもしれないよね。なんでもかんでも普通学級に入れるっていう親も世の中に入るけれども、いちばん本人のためになる教育は何だろうっていろいろと考えなくてはいけないのではないかな。確かに周りが障害者ばかりというのはいいことじゃないかもしれないけれど、養護学校にはサポート体制があるから全否定はしないほうがいいよね。和光では車椅子の子はさすがにいなかった。階段がとてみたいへんだからね。

## 5. Dさんの聞き取り調査結果

(1) 対象者：Dさん、34歳男性。和光幼稚園・和光小学校卒業、その後中学校は公立へ。現在の職業は私立高校音楽教師である。

(2) 調査日時：2003年12月20日（土）

(3) 調査場所：メールにて回答。

(4) 調査内容

①和光小学校での教育を振り返り、障害のあるクラスメイトと共に生活し勉強するという経験を今どのように思われますか

「共同教育」というのは卒業してからずっとして、多分大学生のときに知りました。障害のある友人が当たり前のようにクラスや学校にいたので、それが自然だと思って生活していた。信じられないかもしれませんが、公立の学校でもこれが当たり前だと思っていた。今思うと、幼少期にそのような環境にいと、ある意味自然に受け止められると思います。しかし逆に、障害をもった子どもがもしも自分に与えられたらという恐怖心も正直なところあります。

②障害のあるクラスメイトと学ぶということについて、どのような点を評価されますか。また改善すべき点はどのようなことでしょうか

正直なところ、和光の教育はあまり好きではない。自分に子どもができて、和光には入れたいとは思わない。大きな理由としては、偏った知識の教育（左派的教育等）、その後の自分の学習活動で信じていたことがどんどん違うことがわかり、非常に衝撃を受けた。どんな子どもでも、様々な角度から物事は考えさせる教育を学校はするべきだと思う。そういうことを和光はめざしているはずなのに、非常に狭い角度で当時の和光は教育していたと思う。今は知りません。卒業してからは一度も訪ねていません。

③障害のあるクラスメイトと一緒に学校生活を過ごすなかで、思い出に残るエピソード等がございましたら教えてください。またそのような経験は、今のご自身にどのような影響を与えていると思われませんか

当たり前の点としては、どんな人にも人権があるのだということを実感したこと。しかし小学校低学年の時はなぜ担任が障害児だけを特別扱いするのか、高学年になってからは、クラス対抗の運動会とかで、障害のある友人をどうしたらいいのか、その上でどうしたらゲームに勝てるのかをずいぶん悩んだ記憶がある。そういう点では、人権教育を受けたという感はない。

④「自分のからだ」「病気・障害」「命や生と死」の授業で学んだことや印象に残っているのはどのようなことでしょうか。また「自分を理解する」「他者を理解・受容する」ということにおいて影響を受けたというような経験はありますか

正直なところ、あまりない。でも今、教育の現場において人権教育の大切さはわかるが、ある意味では幼児期の家庭教育がこの問題の根幹にあると考えます。

## 6. Eさんの聞き取り調査結果

- (1) 対象者：Eさん、32歳女性。和光幼稚園・和光小学校・和光中学校卒業。その後私立の高校へ進学。現在は、民間の福祉作業所においてクッキーやパウンドケーキの製造・販売の仕事。ダウン症の障害がある。愛の手帳4度。Eさん父親・母親もインタビュー調査に応じてくださった。文中のFは父親、Mは母親の発言である。
- (2) 調査日時：2003年12月27日（土）午後2時～6時

(3) 調査場所：Eさん自宅にて

(4) 調査内容

### ①和光小学校に入学した経緯

#### 一和光幼稚園入園

M：普通3歳ではいるのだが、4歳から1つ年を落として入園した。当時はまだ全員就学ではなかった。だから小学生でも障害の重い人たちは学校へいっておらず、たくさん人数がいるので1週間に3回程度、障害児通園施設に通い、生活習慣等を学んでいた。担当福祉司の方がそこに紹介してくれ、1年間通った。その通園施設の職員の方が、「もったいない。普通の幼稚園をアタックしてみたら」と言われて、そんな受け入れてくれるところがあるのだろうか、でも探してみようかという感じで、世田谷の地図を広げて家から近いところの幼稚園をずっと探していったが、「うちではちょっと」と断られて、それこそ13番目に和光。和光は家から遠かったけど、時々家の近くで通園バスを見かけていたからなんとか行けるかなって。たぶん駄目だろうなって思いながら電話してみたら、「いいですよ。面談をしてみますからとりあえず来てみてください」と。今までは面談すらなかったのです。門前払いで。でも1件、キリスト教系幼稚園で面談してくれたのですが、そこはやはり肢体不自由とか難聴とかの子たちで、知的な問題の子どもはやはりそれなりの場所でしたほうがいいのではないですかと言われて、もうあきらめながら電話したところが和光だった。

和光での面談のとき、職員室でしたから先生たちの湯飲みや急須がおいてあったんですね。話をしているときに、それを娘が急須を持って注ごうとしたのですね。先生が後で言ったことなのですが、その年齢で、急須で注ごうとする、急須がそういうものだというのを分かっていることをよく見ていたそうなのです。あと外で遊ばせて、先生の後をついて校庭に引いてある線をたどっていけるか、案外その線の通りに歩けたらしいのです。水道で手を洗って、ちゃんと蛇口を閉めたそうです。そういうことが障害のない人と一緒になっても大丈夫というか、ある程度はできることが条件の一つだったのでしょうね。これなら大丈夫だろうっていうことで。ちょうどその時、本格的に障害のある子どもを受け入れる体制にする初めての年だったんです。だからその年は、障害のある子が24名きて、その中の1人だったのですが。障害のない子と同じ学年では厳しいだろうということになり、娘は4歳だったのですが1つ下の学年で受け入れましようかということになり、また3歳だったら自然に障害があるとかないとか関係なく自然に仲間になっていけるということ

もあって、3歳児から受け入れますということになったのです。とても運がよかったと思います。

#### 一 知的障害の受け入れ

F：知的障害の子を受け入れることはとても大変だと思う。24名のうちほとんどが身体障害で、園としてはそういう子をとったほうが楽なわけで、しかも2名しかとらない。1人は難聴で、そのもう1人は知的障害をとってくれたのだから、本当にラッキーだったと思う。娘を見ていて家庭がわかるって言われたのですが、うちでは親がいなくなった後の将来の自立を考えて、とにかく焦っていたのです。だからお茶を注ぐとかを自然にやらせていたのだと思います。あとは通園施設での1年が大きかったと思います。集団のなかで生活の力が身についたのですね。

M：箸の持ち方とか、食べ方とか、着替え、ボタンとか靴の履き方とか、大きかったですね。そういう生活習慣がずいぶん伸びた。そこがなかったら和光の入園も分からなかったですね。

F：1年間で身についたことと、それだけの伸びる力を本人がもっていたことはラッキーでした。あと和光幼稚園は補助の先生を採用してくれたり、主任の先生を町田養護学校からわざわざ引っ張ってきてくれて。

M：障害児保育を本格的にやろうという姿勢というか、専門の経験ある先生を引っ張ってきてくれて、担当でつけてくださって。一番助かったのは、もちろん先生の理解、親の理解ですね。やっぱりなんだかんだ言っても子どもなんて小さいから、子ども同士のぶつかりはたくさんあって。その子ども同士のぶつかりの中で、親が父兄会で色んな話題をどんどん出すのです。そこで親の理解がないと、やはりぶつかりますでしょ？ところがもう、入るときに、障害のある子を入れますと説明会のときに説明をし、それを了解の上で入ってきている方だし、入ってからちゃんと説明をして、こういう趣旨でこうしていきます、と。その説明は、世の中にはいろんな人がいます。隣のクラスには耳の遠い人がいますし、世の中には足の悪い人もいますし、その中で、ダウン症をもっている方です、でも普通の動きはできますし、というのをちゃんと親に説明してくれたのです。それを承知で入ってきた親たちだから、それに対して何か言うわけでもないし、そういうのがとってありがたいかったですね。普通の障害のない子の中でやっていくのは生活の力が必要。親としても気をつけた。

普通の子どもの中へ障害もっていて、どれだけ入っていけるかなというところで、幼稚園の考え方と親の

考え方がありますからね。幼稚園だと友達の家遊びに行ったりしますが、うちの子は呼ばれるとは思わなかったけれど、最初から「いらっしゃいよ」という感じでね。障害をもっている子が初めてですから「何に気をつければいい、それだけちょっと聞いておくわ」というくらいで。

F：母親たちもそうですが、父親においても同じですね。障害児の父親でも気楽にいける雰囲気なのです。子どもも先生も、親たちも。共同教育については、知らなかった。

#### ②和光小学校での教育を振り返ってみて、今どのように思われますか。

F：算数の授業で、この学校すごいなと思ったのは、はじめに先生が10分位説明して、後は子どもにまかせちゃう。みんな出てきて問題に対して答える。一人ひとりやり方が違う。答えが違うときには、なんでこうなったのかと説明する。説明する中で自分の間違いについて気づく。間違ったから悪いとかじゃなくて、なぜ間違ったのかということをつからせる。和光の基本は、全員に100点を取らせるような授業のやり方をしている。

びっくりしたことは、授業でどんどん分からない子が減っていく。うちの子は分からないで、最後の何人かに残る。そうしたらある一人の子が黒板前に出てきて「こんなのそう難しく考えることはないのだ」といって、娘に対して1対1で授業を始めたのです。終わって「わかったか？」って、でも娘は「わかんない」って。それでも平気。娘も平気でわからないことをわからないと言えるのです。これはすごいなと思った。子どもが子どもに教え、先生は後ろで見守っているのです。

幼稚園の夏合宿の時に、面白かったことがあったのです。幼稚園のときは言葉があまりでなくて、表情では分かるのですが、ほとんど会話がなかったのです。でも合宿から帰ってきたら、玄関のところで僕に興奮して話すのです。何を言っているかの分からないのだけれど、興奮している状況がよく分かって、よほど楽しかったのだらうなって。先生から聞いたら、むこうでもそうだったそうです。とにかく和光では驚くことばかりでしたね。東京にもこんな学校があるのだなって。

幼稚園から小学校へいける可能性はなかったのです。娘の前にダウン症の子を受け入れた例があったけれど、結果があまりよくなかったそうで、知的障害だとやはり学力的な問題が色々出てきてしまうから…。結果的

に合格したのですが、これは後で知ったのですが、「幼稚園でこれだけ力をつけたのに、小学校で受け入れられないとはどういうことだ。絶対受け入れるべきだ」と幼稚園の先生が丸木校長に直談判にしてくれたそうです。僕らは小学校ではいけるところまでいいと思っていた。幼稚園の先生からも3年生位でどこかに移るといふことも考えていてくださいと言われていたのです。そしたら中学校まで行ってしまったのです。中学の先生が見たときに「小学生のEさんを見て、これは大丈夫だと思いましたよ」って。なぜかと言うと、生活する力がしっかりできているからだそうです。それで中学校でもとくに問題なく過ごしました。普通の子どもの方がいろいろと問題起こして、そっちのほうが大変だったそうです。中学校では館山合宿での遠泳でびっくりしました。6キロ遠泳のゴールで、一番最後に泳ぐ娘にみんなが応援してくれて、アーチを作って迎えてくれたんです。

E：「えっ？そんなことあったっけ？」

M：たしかに小学校では学業がすごく不安であったし、受け入れる側もそれが心配だったと思うのです。でも幼稚園でおしてくれたのは、生活習慣がちゃんとできていたことと、もう一つは、やればやっていっただけの積み上げがあるということ。小学校では、受け入れますけれど保障できるのは2年3年までで、その後のことはまた検討しようということを受け入れてもらったのです。

低学年はそれほど難しくないから、それが積み上がっていったのです。漢字テストなどもクラスで上位になる位に覚えたり、計算のテストでも結構いいのですよ。先ほどもクラスの子が教えてくれるという話がありましたが、この子が分かるということはクラス全員が分かったということなので、それが利になる。先生はそのような考えだったのです。障害のある子を入れることは、決して障害のある子どものためにやっている訳ではないというか、だから3・4年でも何の問題もなくこのままいきましょうということになりました。

—学習面でだいぶ努力されたのですね。

M：そうですね。コツコツ教えていくと覚えるということがあって、だから1学期のことは復習として夏休みに、2学期のことは冬休みに、3学期のことは春休みに復習させていました。先生にどうしたらいいか相談したり、授業参観だけでは分からないので、その辺は密に連絡を取ったり、面談をしてもらったりして。そうやって聞きに行くことは正解でしたね。その辺で

積み上がったものもあり、それでなんとか授業についていったというか。

漢字が書けるとか、数字が多少というのは、今ある意味では大変に役に立っていますね。作業所で職員の手助けができますから。数も数えられるし、注文の補助とか。養護学校卒業の方はそこまであまりできませんでしょう、学校であまりやりませんので。でも先ほども言いましたように、ずっと普通学級にいたことでできないこともあるし、養護学校のほうではそういうことは弱いけれどやれることはやれるし、その辺は色々ですよ。

F：職業訓練センターなどは本当に単純作業の訓練で、そのような訓練はちょっとおかしいと思います。ただ一つ残念なことは、水泳はできたけれど、そのほかのお稽古事が日々の宿題や予習復習で全然できなかったのは残念でした。今はハーブを習っていますが、養護学校の方はいろいろなお稽古事を覚えて、今でもやっている人がいるのですが、そういうのがないのが残念でした。

M：これからはそういう余暇の使い方も考えていきたいですね。今の職場では余暇活動もやってくれているので、そういうところで一緒に出かけたりしています。学校のうちはいいけど、卒業後には一人だけではできないでしょ。

—進学した私立高校と和光を比べてどうでしたか

F：和光とは全然違う。親同士の関係・協力や子ども同士の関係も、和光と比べたら雲泥の差があるけれど、これは仕方ないのでは。和光は幼稚園からずっと一緒に来ているわけだから、浸透しきっているからね。しかし先生は今でもつながりがあるくらい、和光のような先生が多かった。先生たちも交流がある。大東の先生が和光へ行くことがあったり、和光の先生が大東に行ったり。だからいつでも状況は知っているよって言われます。

娘にいじめもあったのだが（駅などで配っていたコンドームをみんなが娘の机に入れた。娘が性について何も分からないだろうということで）、先生たちがみんなカバーしてくれた。そういう体制があった。でも生徒や親になるとそうはいかない。高校の学力的レベルが和光とは全く違い、学力には自信のない生徒が多い。だから雰囲気的にも和光とはまったく違い、障害のある子の問題よりも普通の子どもの方が問題を抱えているような学校だった。本人も和光に入りたかったのだが、偏差値的に無理で諦めざるを得なかった。入学は丸木先生が推薦してくれた。大東は学力的には

娘でもなんとかやっけていけるくらいだった。かろうじて単位も落とさずやっけていけた。先生のサポートが大きかったからであり、対応が丁寧であった。親にこまかく連絡をしてくれた。

③和光小学校で学ぶということについて、どのような点を評価されますか。また改善すべき点はどのようなことでしょうか。

F：和光で共同教育をやっているといっても、比較的障害の軽い子が多いのです。そういう意味では問題はあかな。でも今の和光の体制では無理であるし、それを国・行政がサポートするわけでもないし、しょうがないかなとは思うのですけどね。今は和光に知的障害の人はいないでしょ。でもこれは親にも問題があると思うのですけどね。娘が入った前後にダウン症児が何人か入っているのですけれど、親に問題があるというのは、和光にトライをしてほしいわけ。ところが親のほうにビビっている人がいるし、知的障害を受け入れないというデマも出るのですね。「ダウン症の子どもを和光へ入れよう！」っていうのはね、ダウン症は幅がとて広いわけで、だからそういう子はチャンスさえあれば和光に入れるわけだから、僕はチャレンジしてもらいたいのですよ。

④友人と一緒に学校生活を過ごすなかで、思い出に残るエピソード等がございましたら、教えてください。またそのような経験は、今のご自分にとってどのような影響を与えていると思われますか。

—エピソード（友達・先生とのかかわり）

M：小学5年のときにクラスの中でいるんな問題がでて、ぶつかったのですね。遅くまでみんなで泣きながら討論したのです。もう終わろうということになり、その中心になっていた子が最後まで納得がいかないって泣いていて、でもみんな帰ってしまって。そしたら娘が、その子のかばんを泣いているそばに持ってきてくれたそうです。その優しさがその子にはとてもうれしかったって。

教室の黒板に明日の持ち物が書いてあるのですが、みんな書かずに帰ってしまうのですが、娘は丁寧に遅くまで残って書いてくるのです。そうすると友達から「明日の持ち物はなんだったけ？」とか電話がかかってくる。のろいけど、確実にやるところが評価されてきたのですね。でも高学年になるとそれだけではやっけていけないことになって、中学でも厳しくなって、和光高校へは点数が足りなくて進学できなかったのですけど。そこで丸木校長が、レベル的には低いけれど普

通の高校を紹介してくれて、その高校へ一緒に行って紹介してくれたのです。周りの子どもにもいい影響を及ぼしているということで押してください。

周りへのいい影響という点では、水泳でもみんなについていけないけれども、最後まで泳ぎ通す姿とかね。周りの子が自分よりもとてもうまいよとか言ってくれたりしてね。あと班長になったことがあったのですが、この子が班長をやることで周りが補助しなくてはならない。そういう中で育ちを先生たちが見ていたのでしょうね。

F：担任ではない先生も娘のことに関わってくれるのです。担任でなかった先生が今でも手紙を送ってくれる。あの学校は先生たちがみんな子どもの担任みたいな、そして職員室は子どものたまり場みたいになっているし。何年経ってもつながりがあって、ありがたいですね。娘の職場で「支える会」というのがあるのですが、和光の先生や友達が会員になってずっと支えてくれているのです。

和光中の子どもたちが文化祭で「障害者」というテーマを掲げ、OBがいるということで見学に行こうということになり、娘の福祉作業所に来たそうなのです。子どもだけで来て、半日一緒に働いてくれて、それで文化祭での発表を娘と一緒に見に行きました。

M：やはり親は学力主義がありますから、和光ではとても学力はつかないからと離れていく人もいます。でも公立などに離れていった人でも話をすると、小さいときに障害のある子と一緒に生活をしてきたってところで、普通の人よりもやはり障害に対する考え方が違うということはあると思います。

F：丸木先生にこんな話を聞いたことがあります。親から「なぜ共同教育をやるのか。障害児がいると普通の子どもの授業が進まない。むしろ迷惑をしている」という意見が出たそうです。しかしその発言をした親の子どもが同じ場所にいて、その親の発言の後に子どもが立って「いま親がそういうことを言ったけど、僕はそんなことをちっとも感じたことがない。むしろ障害のある子がいたおかげで、僕はどんなに助けられたかわからない」と発言したそうです。すごいなあって。障害児がいることは全てプラスではないかもしれないけれども、人間社会はごちゃごちゃしているのが当たり前であるのに、教育で差別したり就職でも苦労したり。そのことをみんなが分かっていないのが歯がゆく思う。そういう意味で、和光のような学校がもっと増えてほしいと思いますね。

M：特殊学級とか養護学校で、小さいころから作業や仕事をやってくるほうが就職という点では強いです

ね。娘は書くとか数とかそういうところは強いのですが、でも作業はあまり早くないのです。養護学校でもある意味ではいいところがありますよね。それとも一つ、養護学校では挨拶や言葉を叩き込まれるわけですが、和光は「気をつけ・礼」とかきっちりしたのはないし、先生に対する言葉使いとか友達同士の挨拶も「どうも」って感じで過ごしてしまったわけでしょう。「おはようございます、ありがとうございます、さようなら」という挨拶が、養護学校などではマンツーマンで教えられて身につけているのですね。娘の職場でもそうなのですが、養護学校から来た子は案外そういうのができるのです。娘はそれができないことで、お店のボランティアさんとトラブルになったことも最初の頃ありました。自分が納得しないと相手の話を聞かないのですよ。ボランティアさんからのアドバイスでも、本人が納得しないと返事をしないので、そういうところでトラブルになったりしました。

—和光でどういうところが楽しかったですか？

E：体育の授業。水泳とソーラン節（3・4年）。

M：水泳、得意だよ。今でもきれいに泳ぐよね。友達関係のことを言っていたけど、友達がずっと助けてくれるわけ。幼稚園から。

E：その中で一人の影響が出てきますね。Nさん。

M：そうだね。Nさんは転校生なのです。他の小学校でクラスの子とうまくいけなくて和光に来たらしいのですけれど、この子が障害をもっているということで、いつも助けてくれた一人ですね。

E：そう。この人との事が思い出のエピソードですね。

M：Nさんとの出会いで何かエピソードがあるの？

E：そうそう、Nさんと会ったことが。とくに中学のときにスケートに行ったのだけど、その時にいろいろとお話をしたのです。あとはS君、私の着ていた洋服を見て、気に入ってくれて、褒めてくれたのだよ。

—総合学習の広島は覚えていますか？

E：覚えてないなあ。

M：広島が学習に影響しているのかどうかはわかりませんが、フセインの話とか、戦争の話とか、そういうことは絶対だめだよって私たちの話に入ってくるしね。こういうのはやはり平和教育の影響もあるのかなって。

—あと何か思い出に残ることはありますか？

E：もう1つ思い出に残ることがあった。理科の担

当のW先生だね。よく覚えている。

M：要するに、いい先生だったのでしょ？

E：そうそう。

M：障害をもっているからということではなく、他の子と同じように対応してくれる先生が好きだったのです。だからそれは友達もそうだったのですよ。さっきも出てきたSさんはすごく面倒をみるというか、娘をみていて面倒をみてあげたいみたいな、でもこの子はそれが嫌いで、そこでトラブルになったこともありますね。障害をもっているから助けてあげようというのではなくて、普通の子と同じように、できないところを何気なくサポートしてくれる友達や先生が好きでしたよね。

E：まあ、苦い思い出でしたけど、Sさんとのことは。（トラブルのとき）私がSさんに謝ったら、謝ったことで周りが胴上げしてくれた。思い出に残るエピソードには苦いエピソードもある。でもみんなから励まされた。

M：子どもも周りからそうやって励ましてもらってききましたが、親もやはり励まされてきた。障害のある子どもを育てるなかで落ち込むこともあります。先生との面談でそのたびにいろいろなアドバイスをもらったり、親たちも声かけてくれたりして。問題が起きたときに、親和会で「問題を起こしてごめんなさい」って謝ったら、「そんなことない！そんなのお宅に限ったことじゃない」といって、お母さんたちがあちこちで声かけてくれて。そのことが、私たちが障害児をかかえても小さくなって生きるのではなくてね、堂々と生きていくことができる糧になりました。

⑤和光小学校では、「自分のからだ」「病気・障害」「命や生と死」について学ぶ機会があったと存じますが、そこで学んだことや印象に残っている授業はどのようなことでしょうか。また「自分を理解・受容する」「他者を理解・受容する」ということにおいて、大きな影響を受けたというような経験はございますか。

F：3年生のときだったかな、クラスのなかでモノが隠されるという事件があって、犯人がわからなくて、娘じゃないかっていわれたのです。それを解決するために、それまでは娘がダウン症であるということ、もちろん本人も知らなかったし、クラスにもいわなかったのですが、先生がはっきり発表したのです。それを本人も聞いて、かなりショックだったみたいです。

M：機会があったら娘がダウン症であるということ、をいいますけど、それまではということでしたが、たまたまそういうことがあって。先生は一度職員

室に戻って校長先生に相談して、それからみんなに話をしたそうです。そしたらみんな、かわいそう、でもそんな障害なのに頑張っているという、次の日には何人もの子どもが作文にして書いてきたのです。友達ともトラブルは結構ありましたね。

E：それは覚えている。

## 7. Fさんの聞き取り調査結果

(1) 対象者：Fさん，32歳男性。和光幼稚園・和光小学校・和光中学校・和光高校卒業。その後中央大学文学部英米文学科へ進学，卒業。現在の職業は点字図書館職員であり，中途失明の障害者に点字とワープロを教える仕事に携わって6年になる。両網膜芽細胞腫のために8ヶ月で摘出手術，全盲，障害者手帳1級である。Fさんの母親もインタビュー調査に応じてくださった。文中のMは母親のコメントである。

(2) 調査日時：2004年1月11日（日）  
午後1時30分～5時

(3) 調査場所：Fさんの自宅にて

(4) 調査内容：

### ①和光小学校に入学した経緯

M：特別に和光ということではなく，最初は地域の小学校に入れたくて，学校で一緒に勉強して帰ってきてからもまた遊べるようになればと思っていた。でも公立では受け入れられないといわれたので，盲学校に行くしかないと思っていた。幼稚園も和光でということではなく，地元の幼稚園と思っていた。和光に弱視の子が入ることになり，そのときに都立心身障害者福祉センターの指導員の方が和光幼稚園の先生に声をかけてくれたのがきっかけ。入ってから共同教育という言葉を知った。和光幼稚園に入って，丸木先生の書いた本を読んだり，教育のあり方を知って，ぜひ和光小学校に入れたと思った。

### ②和光小学校での教育を振り返ってみて，今どのように思われますか。

公立の様子はわからないので，私がどれだけ捉えられているかわかりませんが，和光の教育は特殊といえば特殊ですね。高校のときに近くの公立高校の生徒と一緒に合唱をやっていた関係でわかったのですが，同じ英語の教科書を使っているにもかかわらず和光は全然進み方が違うというか，2倍の時間がかかるという感じですね。全員がわかるまでやるというように。

### —学習面でのサポートは？

小学校はなんといっても，教科書が手作りで独自なことです。私は2つ上に全盲の先輩がいたので，その教材をまわしてもらっていましたが。今は点訳ボランティアがたくさんいますよね。1979年に私が小学校に入学したときはパソコンなどなくて，また点訳ボランティアもそう多くはなかったわけですね。小学校の教材ですから，そんなたいしたものではないけれど，学校の方は何も用意してくれないわけですよ。墨字の教材を渡されて，それを授業までに間に合わせるように点訳をしなければいけないわけです。教材は基本的には親。普通の子どもの親はしなくてはいいことをやっていたわけです。当然やりきれないわけではなく，時間のある同級生の親が手伝ってくれたりもした。点字を知っている人はいなかったけれど，レーザーライターを用いて線を引いてもらう，そういうことでもだいぶ助けになりました。そういうのがずっと続いていくわけです。学校が用意してくれるのはタイプライターや点字用紙など。

### —点字はいつから

生まれて8ヶ月で見えなくなりましたので，都立心身障害者福祉センターへ通い始めて障害者手帳も取って，2歳～3歳位で触り始めたと思います。どこに点があるとかないとか。でもはじめに教えてくれたのは母親でした，小学校入る前に。あとは家庭教師も1週間に1回くらい来てもらっていた。でも私は点字を読むのはそんなに好きではなかったのです。何回かきっかけがあって読むようにはなりましたが。小学校のとき，5・6年になると点字の比率は高くなりますけど，それまではほとんどレーザーライターで書いていたことが多かったですね。ノートをとるときなども。5・6年になるとさすがに量も多いし，レーザーライターだと後で読むのが大変なので点字になっていって，中学校になると途中から全部点字になっていったような感じですね。その方が効率いいです。

### —点字ができる先生がいらしたのですか？

そう，これも和光だからだと思うんですけどね，点字のわかる先生がいましたね。小学校では2人，中学はいなかった，高校は1人。教材を作ってくれたりもしましたよ。小学校の先生は提出したノートへのコメントも点字でうってくれたりしました。担任ではない先生でも，点字で教材を作ってくれたりしてくれました。でも到底間に合わないのですよね。だからほとんどが親。でも2年か3年のときにようやく世田谷で点

訳ボランティアが動き出したのです。あとはどうしても読みたい本などは、日本点字図書館へ持ち込みですね。タイプライターで全部作成してくれて、作るほうも大変ですよ。間違えると文字をつぶさなくてはならないし。だから今はパソコンが出てきて本当に便利になりましたね。

—授業では黒板を用いることがあるかと思いますが、そういう時はどうしていたのですか？

周りが読んでくれたりはするわけですね。あとは先生も黒板に書いたことと同じことを必ず言ってくれる。それでなんとかやってこれてしまうのだよね。

—中学や高校では

そうですね、隣に座った子には負担がかかりましたね、確かに。読んでもらっていましたが、ずっと。授業中眠いときなんかは大変でした。声かけたら向こうが寝ていたり、こっちが寝ていたり。大学に行くとき講義が多いので楽でした。だから何とか乗り切れました。理科も実験をやっていました。体育は、球技になるとボールがあちこち飛ぶので、友達や先生と手をつないで同じように走ってやっていました。私がボールを持ったときは、ボールを取り合わないというルールを作ったり。サッカーはまだいいですが、バスケットボールはボールが空中にあることが多いからなかなか難しい。リングの前に立っていて、味方がボールを渡してくれたのを、目の前のゴールに入れるという参加の仕方ですね。バレーボールではサーブだけするとか、部分的な参加ですが、全然別という感じではなかったですね。マット運動なんかは問題なくできましたが、跳び箱は多少問題がありますよね。それでもやっていましたね。水泳もコースロープにはぶつかりますがそれほど難しい問題はなく。中学校では館山で遠泳があるのですが、非常にゆっくりですから、その点でも問題なかった。私は見えただけだからいいですけど、足が不自由な子などは手だけで泳ぐとか、そういう人もいましたね。

③和光小学校で学ぶということについて、どのような点を評価されますか。また改善すべき点はどのようなことでしょうか。

—評価点

和光だったからなんとかやっていけたというはありますね。私が入学していた頃に、やっと統合教育の事例が出始めていたのです。入ったはいいいけれどもお客様扱いになって、統合教育といういかにもよさそうな感じですけども、うまくいかない事例というのは結

構あるみたいですよ。社会に出てからの社会性の問題でも、健常児に混じっていたわりには、ほとんど育ってないとかよく聞きますね。統合教育だから良かったというわけではなくて、和光だから良かったということは言えるだろうと思います。

—改善点

和光でなかなか難しい点は、視覚障害者としての情報が入ってこないわけですよ。盲学校にいと養護訓練の時間に、杖を使う勉強が授業の中に組み込まれているとか、テーブルの上にある背の高いコップをどうやって倒さずに探せるかとか、お金の種類わけとか、掃除をするときにどうやったら汚れを残さずできるかとか。そういうことがどうしても必要になるわけです。それをやる手段がなかったのです。小学校6年間の学校の行き帰りは、毎日弟と一緒に手をつないで、学校の中でも杖を持っていなかったです。よくぶつかることはありました。

でもさすがにそろそろ杖をもたせなきゃと親が思ったこともあり、5年生の夏休みに都立心身障害者福祉センターの歩行訓練士の方に来ていただき、はじめて歩行訓練をしました。もう最初は杖の使い方からですね。後ろから訓練士と親がついてくるんですけど、学校まで普通に歩けば25分のところを、40分くらいかけて歩いたのが杖をついた初めての体験ですね。中学になって半年くらいは親がついてきていた。歩行訓練を受けたのは、あとは大学に入るときくらいでしたね。いろいろとやらなくてはいけないことはあると思うんですけど、学校はそういう情報をもってきてはくれないわけです。視覚障害者として覚えていかななくてはならないことは、だいぶ遅れたと思いますよ。盲学校に通っていた生徒は、中学生になると一人でどこでも結構行ってしまったりするのですが、そうなったのは私の場合とても遅かったのです。そういうわけで、実際母親が教えてくれるようなことが多かった。調理なんかも。その点をどうするか、どっちがいいかは難しいですよ。ただ一緒にというだけではだめなのです。

大学に入って、たまたま視覚障害をもつ大学生の集まりに参加したことがあったのですが、ほとんどが盲学校の卒業生で、統合教育を受けたのは私ぐらいだったのです。盲学校は歩行訓練や養護訓練をやるし、平日頃から基本的には一人でやるものだしというようなことを言われて育ってきているわけで、だから自分よりもはるかに行動的なわけです。その頃でも私はまだ一人でどこか行けるわけじゃなかった。行動的という

か、それは大学生になると当たり前なのかもしれないですけどね。盲学校より統合教育の方がいいとばかりはいえないとその時に思ったのです。

④和光小学校では、「自分のからだ」「病気・障害」「命や生と死」について学ぶ機会があったと存じますが、そこで学んだことや印象に残っている授業はどのようなことでしょうか。また「自分を理解・受容する」「他者を理解・受容する」ということにおいて、大きな影響を受けたというような経験はございますか。

知的障害・聴覚障害・肢体不自由などの子どもが周りにたくさんいましたけど、小学生だということもあると思いますが、障害について知る機会はそれほど多くはないです、実際は、他の障害を理解するようなことはあまり多くはなかった。私は他の障害のことをあまり知らないですね。私は世の中では重度（障害者手帳1級）と呼ばれる障害ですけど、40歳になって全盲になったとしたら確かにそれは重度だと思いますが、生まれつきに近い人間にはそれははたして重度といえるのか。確かに社会に出て仕事をしようとする、外出や文書処理などで問題になると思いますが、今の職場では非常勤のワークアシスタントがついており、回覧文書を読んでもらったり書類を書いてもらったりしていますが、私が重度ならば他の人ももっと重度ですよ。和光ではやはり軽度が多いですよ。こんなに障害の重い人がいるということ、この仕事をはじめから知りましたね。弱視で全聾の方とか。

## 8. Gさんの聞き取り調査結果

- (1) 対象者：Gさん、31歳男性。和光幼稚園・和光小学校・和光中学校・和光高校・和光大学卒業。現在会社勤務。Fさんの弟である。
- (2) 調査日時：2004年1月15日（木）  
午後9時～9時50分
- (3) 調査場所：電話にて回答。
- (4) 調査内容：

### ①和光小学校に入学した経緯

兄（Fさん）の方が先に入っていて僕が入った。一年就学猶予をした兄と同じ学年で、ずっと小学校から中学・高校と進学しました。親の意思です。

②和光小学校での教育を振り返り、障害のあるクラスメイトと共に生活し勉強するという経験を今のように思われますか

他の学校は障害児を受け入れる体制がないとか、健

常児とは違うクラスがあるというのを知らなかった。高校生になって他の学校出身の子が増えてきて、そのとき初めて障害児には障害児のクラスがあるということを知ったのです。結構不思議でした。同じように教えていくというのは、先生は大変だと思います。しかし盲人や耳の聞こえない人もいたのですが、みな普通にやっていたので。

### —知的障害のある子について

さほど変わりなく。ただ放課後に先生と補習をしていたかな。でもあとの体育や音楽などは普通にやっている感じで、急にパニックになってしまうような子はなかった。

### —共同教育についてご存知でしたか？

兄貴が普通の健常児と同じ学校に行くのに問題があるというような発想がなかったですね。兄貴は楽器とか音楽が好きで、その友達というのがちゃんとしたから。だいたい勉強ができたか学級委員という感じの子達が傍にいてくれたから、だから小学校は毎日一緒に通っていたけど、中学校は別々に通うようになって。兄とは違うクラスだったので授業の様子はあまり分からなかったけど、兄の担任によく手伝ってと言われましたね。運動会の踊りの練習を、放課後に兄と二人だけで一緒に練習したりしたとか…。

③和光小学校において障害のある友人と学ぶということについて、どのような点を評価されますか。また改善すべき点はどのようなことでしょうか。

先生が努力してくれた。普通ではできない理解があったから兄は卒業できたのだと思う。授業では鈴の入っているサッカーボールを用意して、ボールを追いかけてたり、転がったボールの方へ走って追いかけていたり。端から見ているとそれはサッカーではないのだけれど、でも本人にはそれで満足できる度合いにまでいっていたと思うのです。そこに先生が付き合ってくれないと成り立たないことなので、そういうことがとても助かるというか、それがないとやれなかったと思いますね。あとははじめとかも学校ではなかったの、悪いところはあんまりなかったかな。

### —周りの子も障害に対して理解があったのですか

興味持たない子は接しないし、その辺がはっきりしていたので、いたずらとかいじめとかなかったと思うんです。和光幼稚園からあがってきた子どもがほとんどの割合を占めるので、大多数が4歳5歳から兄の存

在を理解していたので、その辺もよかったのではないですかね。

#### 一配慮も自然に？

そうですね、心配するということがなかったから。例えば移動するにしても特定の子がというわけではなくて、誰かが手を引いてくれていたみたいで、そういうことが自然とできていたんです。水泳の授業でも、水泳帽が裏か表かとか、前か後ろかとかというのを誰かしら言ってくれてかぶせてくれていたのですね。不思議とみんながやってくれていたなって。中学に入ってから、誰かと下校していたみたいだし。

④障害のある友人と一緒に学校生活を過すなかで、思い出に残るエピソード等がございましたら、教えてください。またそのような経験は、今のご自分にとってどのような影響を与えていると思われますか。

和光を出た人たちをみると、やはり変わっているのです。同級生がしている仕事を考えると、カメラマン、俳優、歌手、芸術家などに育っている人がとても多いのです。そういうことが普通と違う気がする。やりたいことやっているということだけなのかもしれないけれど、そういう方向に走る同級生がほとんどなのです。そういう環境にいたから、勉強ばかりでもなく、例えば兄の落語にしても、先生がプライベートで一緒にどこかのホールに連れて行ってきてくれたので、そういうところを伸ばしてくれるというか、それが和光の特徴というか。みんなに変わり者って言われますけどね（Gさんもテレビカメラマン関係の仕事についていた経験がある。）

兄貴がいたからだとは思いますが、視覚障害者のかたが電車に乗っているときなど、話をしたり手を引いて一緒に歩いたりすることは、僕には躊躇なくできるかな。和光にいる子は、さりげなく配慮できる子が多いけれど、共同生活をしたり、毎日一緒にいることでそうなるのでは。

### 9. Hさんの聞き取り調査結果

(1)対象者：Hさん、31歳女性。和光幼稚園・和光小学校卒業。その後は公立中学校。現在私立高校体育教諭。

(2)調査日時：2004年1月15日（木）午後10時10分～10時55分

(3)調査場所：電話にて回答。

(4)調査内容

①和光小学校での教育を振り返り、障害のあるクラスメイトと共に生活し勉強するという経験を今どのように思われますか

小さい頃から一緒だから。和光に来る子は重度の障害をもっている子はいなくて、共同生活することができて、自分と違うなどは思っていたけれども、そういう障害のある子と一緒にいるということは普通というか、普通の友達と全く同じような関係でしたね。小さい頃は、友達に障害があるということについて理解できていなかったし、親から友達に障害があるということについて説明された記憶があるけれど、よく覚えていない。全盲の友達もいましたが、義眼をしていて、義眼を取るときなどは幼心にとてもよく覚えています。

#### 一授業について

だんだん学年があがるにつれて、勉強面では遅れていった感じがします。先生たちが見えないところで個別指導をすごくしていたと思う。クラスのなかで問題（盗難など）が起きていたことが多く、それに絡むことが多かった。それについて障害があるから特別扱いするのではなく、先生がみんなのこととして投げかけて、クラスの中でいっぱい話し合った気がします。

障害のある友人は、和光に行って良かったと思う。何が良かったのかを考えると、真剣に考えてくれる先生が周りにいるということ、色々な経験から学べることに。私たちもかなり育てられた部分が多いし、小学校のときはいろんなことを感じていましたね。戻りたいなと思いますね。

②和光小学校において障害のある友人と学ぶということについて、どのような点を評価されますか。また改善すべき点はどのようなことでしょうか。

何が良かったのかと振り返ると、行事などを通して自分の考えを引き出してくれる先生がいたことが一番ですね。行事などをやる毎に、悔しい思いや、やり遂げた感動などをすごく自然に出せたというか、それを一緒に感動してくれる先生や友人が周りにいることが自然だったから。私はとくに和光とはぴったり合っていたのだと思う。先生っていいなって思うきっかけももらったし、いろいろなことを教えてもらった。喜ぶときは一緒に喜んでくれ、中途半端に怒るのではなく思い切り怒ってくれる。

和光は障害のある子を迎える学校側の体制がしっかりできていたなと思う。そういう環境を作っているところはすごいと思う。和光で受け入れているような子どもがうちの学校にきたら、私も含めて教員は、どう

してよいか分からないと思う。障害のある子は、和光みたいななかで育ててきていないから、親などから今まで頑張れというふうで育てられてきている子が多いから、気が強いというか、周りが手を出すことに反発してみたりするような子が多く、ちょっとしたことで問題が起ったり。和光では、がんばればがんばれとはいわないですね。でも健常者の中で、がんばろうという意欲も育てられていたのかなとも思いますけれどね。

③和光小学校では、「自分のからだ」「病気・障害」「命や生と死」について学ぶ機会があったと存じますが、そこで学んだことや印象に残っている授業はどのようなことでしょうか。また「自分を理解・受容する」「他者を理解・受容する」ということにおいて、大きな影響をうけたというような経験はございますか。

友達が病気・障害を持っているということは、やはり分かっていたのかな。何年生の頃か覚えていないですが、母親に障害のことを教えてもらって、障害のある子は短命という説明を受けたことがあるのですが、とくに幼心にズキンときて「そうなのか…」と思ったことをよく覚えています。学校でも3・4年生の頃に友達の障害についての説明があり、その友達がいないときに、先生から障害についての説明を受けて、みんな涙を流して聞いた記憶があります。

よくふだんからみんなで話し合いをしあってきた。簡単な話し合いではなく、ドロドロするくらいの泣きながらの話し合いをよくしていた。全部自分たちで作りに出していくということはすごいと思う。責任を持って自分たちが動けたということは、とても楽しかったですね。

#### 10. Iさんの聞き取り調査結果

(1) 対象者：Iさん、32歳男性。和光小学校卒業、その後中学校特殊学級、養護学校高等部へ進学。現在は東京理科大学（数学専攻）学生。脳性麻痺の障害がある。Iさん母親もインタビュー調査に応じてくださった。文中におけるMは母親のコメントである。

(2) 調査日時：2003年12月14日（日）

午後3時30分～6時00分

(3) 調査場所：Iさん自宅にて

(4) 調査内容：

##### ①和光小学校に入学した経緯

M：小学校は地域の小学校に入れるつもりだったのですが、歩くのもまだよく歩けない感じだったので、

小学校の校長先生に相談に行ったのです。そしたら私の手前おっしゃったのだと思うのですが、「お子さんは顔つきもしっかりしているから、特殊学級でなくて普通学級でもいいですよ。ほらみてごらんささい、あの特殊学級の馬鹿ばかりのいるクラスに入らなくていいですよ」と言われて。私の手前、お宅のお子さんはいいよと言っても、障害者をとて見下している先生だなんて思ってこの学校には入れたくない、先生がOKと言っても私は嫌だと思ったのです。

それではどうしようかと思っていたときに、新聞で和光の全盲の高橋しのぶちゃんの記事を見たのです。和光では今まで肢体不自由は受け入れていたけど全盲は初めてだと朝日新聞に載っていて、ここは肢体不自由については以前から受け入れていたのだと思い、わらをもつかむ思いで和光小学校へ相談に行ったのです。相談に行きましたら、3月生まれだから1年就学を遅らせて、来年だったら受け入れられますので待っていてくださいと言われてまして、幼稚園でも3月生まれだからもう1年いてもいいということで、それで次の年に和光を受験して合格したというのが経緯です。

私は幼稚園・小学校を普通学級で、中学・高校を養護学校でよかったですと思います。幼稚園や小学校の子どもはかけ引きも遠慮もなく、対等にお付き合いするでしょう。それがとてもよかったと思うのです。でも小学校は親がうるさく、親の声が反映して子どもにくだりでしょう。親が口を出さなかったら和光小学校とはもっといい関係だったと思います。でも和光は三位一体といって、親と先生と子どもが一緒になってという、私にとっては変な教育でした。親は家庭で教育をちゃんとすべきであり、学校にそんなに口を出さなくていい、親が教育に口を出しすぎだと思えますね。

今でも覚えているのは、障害児をクラスに受け入れてどうだったかというのを全校の親が集まって発表したのですが、私はとても胸が痛かったのです。私も若かったから、子どもが皆さんにご迷惑をおかけしているっていう気持ちはどこかにあったのですね。でも、そう思わせるような雰囲気だったのです。初めての子どもでもあり、また健常者の中に子どもを入れるということは、私にとっては嵐の中にいるような感じでした。そこで何を言われたのかというと、「うちの子はIくんがよだれをダラダラ出して気持ち悪いと言ってている」とか、そういうことを皆の前で言うのです。それは障害があるから当然なこと、どうしてそういうことを皆の前で言われなくてはならないのだった。でも私には反発するだけの力もなかったのです。本当に心の痛いことが多かったですね。

②和光小学校での教育を振り返ってみて、今どのように思われますか。

I：僕は学校の勉強だけでなく、山に登ったり、キャンプをしたり、かまどを作ったりなど、自分の身体で体験したことが今の財産になっている。

M：そうだね、本当にそれは先生方やボランティアの方が関わっていろいろやってくださって。

I：一番学校で大変だったのは、とにかく移動が多かった。美術室、音楽室などへの教室移動。荷物を手で持てないし、手すりもないから、顎で道具を持っていた。

M：障害があるから手すりをつけましょうという学校ではなかったものね。

I：一番怖かったのが階段。僕は、昇りはできるけど降りるときはまるでだめだけから、壁につかまって、冬になると冷たくて。もうクタクタで、給食も寝ながら食べていた。

M：よくがんばったと思いますよ。もっと体が小さくて不自由だったでしょう。だから6年間毎日、今日は怪我なく過ごせるかなと、どこにいても気が休まる時がなかった。和光の「自立」について、とても疑問でした。体が不自由なのに、お母さんが送り迎えするなという。こんな体なのに、なんで送り迎えしてはいけないのって。自立は親が一番考えていることです。それなのにロボットじゃあるまいし、今日からすぐ自立とってポンと手を離して、できたらこんなに楽なことはないですよ。自立するための段階を踏まえての話ではいいですけど、「自立させてください、自立させてください」って。じゃあどうしたらいいの、何か協力してくれるのといって、それはちょっと理解できなかったです。

I：帰りの会で先生が、今日は時間あるからIくんのことを話し合おうということになったのです。僕泣いたもん。Iくんのことと批判とか文句のある人はいいなさいって。それからみんなで一斉に、子どもだから、わーって言って。あれはちょっとこたえた。精神的に疲れた。

M：そうだよ、きつかったよね。なんで障害者をそういう扱いをするのかしらね。批判したりしてね。みんなで助け合いましようとか、障害があつてこうだったら困った、わからないことがあったらI君に聞いてくださいとかいうのならわかりますけど。Iがどうしようもないこと、食べるのが遅いとか、歩くのが遅いとか、教室移動に遅刻してくるとかね。先生が、それはI君には障害があるからって言えばいいのに、言わせっぱなしで。だから子どもはそれでいいと思って

いるのです。すごく間違っていると思います。

I：あと僕の机の近くにペンが落ちていて、誰かが悪気なく拾ってくれたのだけれど、僕ではなくて隣の子ので、Iがとったということになる。

M：子どもだからいろいろあるけども、障害があるがゆえにいじめられたことがあったね。

I：うん、ある。

M：だから共同教育ってなんだろうって不思議でしょうがなかったんです。

I：いじめがなくなる。だけどまた的をしばって僕目がけて攻撃するのです。それが大変だった。

M：それが大変で、やめていったお子さんもいるのですよ。

I：僕机の上で耳を塞いで泣いたもん。ポロポロ。

M：先生の影響力って大きいですよ。小学校ではとくに。先生の人格って大事ですよ。小学校を卒業する前に、先生が中学校にいかせる自信がないって言ってきたのですが、うちはやりませんって言いました。なぜかという、思春期にいじめられたり自信をなくしたりすると、一生涯辛いだろうって。

I：僕も行きたくなかった。

M：精神面でやられると、一生涯それが続いて元も子もなくなったらいけないから、伸び伸びとしたあたかいところに行かせようってことで、中学校の特殊学級を選んで、そこでよい先生に出会ってとってもよかったと思う。和光小学校や養護学校でも思いましたが、能力別に分けるものは分けたほうがいい、それで一緒にやれるところはやるということも大切ではないかと思いました。それが差別だというけれども、逆差別もあるのではないかと思いました。本当に自分が伸ばしたいものが伸びないのですよ。中間ぐらいにいる人が、何やっていいかわからないっていうか宙ぶらりんというか。養護学校では重度の人に手がかかり過ぎて、あとはほったらかしという感じ。

一障害に甘えない、自立という言葉について思うことは

M：甘えるんじゃないというけれど、なにも甘えてなんか生きていないですよ。障害があるということが、甘えてないってことです。障害があつて生きていくってことは大変で、本人だつて楽に動きたいです。それが甘えていることですかと今だつたら言えますが、あの時は言えなかったな。甘えたらいけないことだろうな、一生懸命生きてるのにどうしてそういうこと言うのかしらとっていて。

I：結論から言うと甘えるのは甘える、できるもの

はおれがやる。その何が悪いのって。

M：そうよね、やりたいけどできないだものね。

I：高校一年から自立、自立って言われたけどね、自立ってやっぱりわからない。

M：養護学校では、作業所に就職するために、先生とにかくニコニコ笑っておきなさいって言われたけどね、「僕はそれにすぐ反発をもった」と言っていたよね。「人間なのだから喜怒哀楽があつていいじゃないか。嫌だったら嫌だって言っていたいいじゃないか」って言ったら、先生に怒られたと言っていたよね。

I：そのこともう少し話すとね、とにかく人から好かれなさい、いい子でありなさい、素直でありなさいって、全部僕とはあわないのよね。なんか健常者の思想というか、自分が信じていることをポンポン言っているよね。

M：やっぱり上から見下すような、障害者はだめな人間なのだから私がどうにかしてあげようという過剰意識があるのではないかしら。

I：だから障害者は、変に心がゆがんでくるのですよ、自立をしなくてはとずっと言われてきているから、俺は自立をしなくてはと変にがんばってしまうのね。がんばらなくていいところをがんばってしまうのよね。

M：和光の障害児のお母さんたちは、和気あいあいとうまくやっているのかしら、悩みはないのかしら。私たちのように卒業した親たちを交えて、お母さんたちの悩みとかを聞くことができたらしたいですよ。自分の気持ちを共有してくれる人がいないのかなと、いつも私は和光にいたとき思っていたから。総合的に、和光に行ったことは本当に良かったと思います。行くところがなかったというか、区立の小学校でも受け入れてくれたら地域の子とも遊べてよかったけれど、当時は受け入れてくれなかったから、和光が受け入れてくれたのですよね。

小さいときに普通の子どもの中に入ったことはとてもよかったと思います。中学から入ると、みな優しいけれど、言葉を交わすだけで本当のお付き合いができないから寂しいのですって。障害者をいじめていると思われたくないから、無視して知らん顔しておこうとか。小学校・幼稚園ではありのままに付き合えたから、本当によかったと思います。だから子どもにも障害のある子が入ったほうが、思いやりとかいう面でとてもいいと思います。でも先生次第ですね。

③和光小学校において障害のある友人と学ぶということについて、どのような点を評価されますか。また改

善すべき点はどのようなことでしょうか。

M：夏の合宿は、本当にいい経験させますよね、和光は。親でもできません。それが今でも続いているっていうのは嬉しいですね。山登りはちょっとがんばりすぎたかな。最後まで険しい山も一生懸命登って。先生もすごかったですね。ずっとIについてね。脳性マヒとしてはやっぱりちょっと無理だったかなって今思うと思いますけどね。

Iは数学にしても何かするのでも全てにワクワクするって言いますが、こういうことは幼稚園・小学校をどのように過ごしてきたかによって植えられるのではないかなって私は感じるのです。和光の嫌だったところも言いましたが、こういうのは和光のおかげだと思います。

I：うん、そうだね。だから逆に、養護学校での単純な作業学習には興味が全然なかった。それが進学を選ぶことにもつながった。

M：障害者というとなんでも訓練、訓練となりますが、健常者も訓練、訓練といわれたら楽しいですかと思います。人間はやはり楽しくないと進歩しないから。楽しいことは脳も活発になるし、心もワクワクしてくるし、それが訓練じゃなくて生きるというか、自分がワクワクすることが次につながるのではないかとIをみていてそのように思います。Iは洋服の脱衣ができなかったから、お母さん家でもっと訓練させてくださいと和光でもよくいわれたけれど、訓練してできるものならやります。でも左手がこんなに不自由なのに、不可能なボタンとおしの訓練ばかりしていたら楽しいでしょうか。できるものを伸ばしてあげたいというのが親の気持ちで、できることから伸ばしていくと、それがまた次のものに結んでいくのですよ。本人がやりたいものをさせることが大切だと思っています。

もっとIのありのままを自然に受け止めてくれたらよかったね。あまりにも意識しすぎというか、障害者はこうでなくてはいけないとか、健常者と障害者の共同教育だから何か問題を作らなくてはいけないとか、周りに合わせなくてはいけなかったり、障害者を酷使していると思う。

④友人と一緒に学校生活を過すなかで、思い出に残るエピソード等がございましたら、教えてください。またそのような経験は、今のご自分にとってどのような影響を与えていると思われますか。

I：いろんなことが今の僕の勉強につながってきたと思う。例えば今は数学を勉強しているけれど、雨の強さ、風の強さとかそれによって傘が重くなるとか、

それがベクトルに関係するとか、音の波とか、そういう体験が数学に関係している。ただ数字を勉強しているのではなくて、そういう実生活からの楽しさがあるんだ。それは和光で学んだり、遊んだり、体験したことが、今の大学での勉強において影響しているのかな。あとは様々な人の考え、価値観、表現の仕方があることも知りました。

⑤和光小学校では、「自分のからだ」「病気・障害」「命や生と死」について学ぶ機会があったと存じますが、そこで学んだことや印象に残っている授業はどのようなことでしょうか。また「自分を理解・受容する」「他者を理解・受容する」ということにおいて、大きな影響を受けたというような経験はありますか。

I：自己への理解はなかったけれど、僕が相手を理解することはあった。身体が不自由で、自由に動けないから、常に人や人の動きをみている。自分がどういう立場なのかなとか、自分はおいていかれたとか、自分についていけなかったとか、あの人が迎えに来てくれたとか……。常に自分は相手を見ていたけど、向こうが自分を見ていたのかというのではないでしょう。自由に動いている人はあんまり周囲を見ないじゃないですか。汽車も速かったら外の景色を見ることができない、ゆっくりと動いたら景色を見ることができると一緒で。和光はいま振り返ると、楽しいことや面白いことがたくさんあったな。

M：そうね、和光は楽しい思い出がいっぱいあるものね。そういうところでたくましくきたから、今があるかもしれません。いじめられても、やり返していたものね。いじめられてやめていった人のお母さんが言った言葉、本当だと思ったんですけどね、「I君は身体が不自由だからいじめられると、障害のある子をいじめたとなるからまだいいけれど、うちの子はちょっとした遅れがあっても目立たないから、普通の子のように扱われてかえって弱いから、いじめられて大変なのよ」と。でも私は、身体が全部動いて五体満足なのだからとっても羨ましいと言ったけれども、お母様の気持ちもよくわかるなと思いましたね。その子はとうとう辞めてしまって。やはり障害の種類によって、親の考えもだいぶ違いますね。

## 11. 考察

### 1.1 和光小学校の影響

通常の卒業生への聞き取り結果では、和光で障害を有する友人と一緒に過ごしてきた経験を振り返り、

「障害のある人もない人も普通にいるのが普通の社会」「どのような人にも人権がある」「障害があっても対等である」という価値観の形成や、「異質を排除するのではなく、人はそれぞれ違っていいのであり、その上で必要な支援を配慮する」「躊躇なく障害のある方に対して配慮することができる」という障害者への現在の姿勢に影響していると評価している。

それらの価値観や姿勢は「植えつけられたのではなく、自然にできているのが和光である」、すなわち教師が「障害」にとくに目を向けて学ばせようとしたのではなく、通常の学校生活のなかで障害児の問題もごく自然に取り上げ、自分の問題として考えさせようとしていた点を評価している。また「障害のある人がいて当たり前で、だけど世の中で当たり前になってなくて、そういう世界を何とかしたい」という思いから障害者福祉の職業を選ぶ、その根底は和光で障害のある友人と過ごしたことであるという卒業生のコメントもあった。

このように調査から通常児が障害児から影響を受けていることが示されたが、では障害児は通常児のなかで過ごすことでどのような影響を受けているのだろうか。

脳性麻痺のBさんは「例えば死んでしまいたいと思うような自己否定や追い詰められるということがなかった」「障害があるからって卑屈に思ったりはしないってというのは、和光の教育のおかげなのかもしれないと思う」と述べている。

全盲のFさんは「(通常学級に)入ったはいいいけれどもお客様扱いになって、うまくいかない事例というのは結構あるみたいですよ。社会に出てからの社会性の問題でも、健常児に混じっていたわりには、ほとんど育ってないとよく聞きますね。統合教育だから良かったというわけではなくて、和光だから良かったということは言えるだろうと思います」として、十分な対応・支援をうけられずにお客様状況にある統合教育の例と比較して和光の取り組みを評価している。

脳性麻痺のIさんは、周りの友人や教師の影響のほかにも「和光で学んだり、遊んだり、体験したことが、今の大学での勉強において影響している」というように、和光における実体験を通じた学習経験が、現在の自分の何をするにつけワクワクして物事に取り組む姿勢や興味をもって何かを調べる姿勢の基礎にあり、それがまた進路選択にも影響していると評価している。

### 1.2 障害児からみた共同教育の課題

Aさんの聞き取りにおいて「(障害児が)『障害に甘

えるな』と先生に怒られたことが印象に残っている。障害のある子に対しては、逆にそういう意味では厳しかったと思います。優しくというのはなかったですし、普段はみんなと一緒に同じに扱っていたと思います。「障害があるっていうことをそんなに意識せずに生活しましたね。障害があるからどうのっていう教育ではなかったですね。優しくしてあげようというコメントは絶対ないし、ほんとうに自然な形で一緒にいたと思う」と述べられている。

それに対してIさんとその家族は、「共同教育ってなんだろうって不思議でしょうがなかった」「ありのままを自然に受け止めてくれたらよかった」「中学校の特殊学級を選んで、そこでよい先生に出会ってとってもよかったと思う。和光小学校や養護学校でも思いましたけども、能力別に分けるものは分けたほうがいい、それで一緒にやれるところはやるということも大切ではないかと思いました」と述べている。

また知的障害児の共同教育においては、よりいっそう学力的な部分がネックになることが多い。知的障害のEさんの場合、親と教師との密接な連絡・サポートと本人の努力が中学校までの進学を支えたが、Eさんは学習面でクラスメイトについていくために休みの時間を削ってまで予習復習の時間にあててきた。「お稽古事が日々の宿題や予習復習で全然できなかったのは残念でした」「これからはそういう余暇の使い方も考えていきたい」と母親も述べるように、Eさんはほとんど全てを学習時間に費やしてきたために、現在でも余暇の使い方に悩むところでもある。

通常児のなかで学習していく際に、周りに合わせる事がとりわけ要求されるが、それが障害児の大きな負担になっている場合が多いことがわかる。周りと同じようにという通常児のスタンダードを意識しすぎると、それぞれの障害児が有する困難・ニーズにたいする支援を見失ってしまう。

そのことに関わって、Gさんが聞き取りのなかで「本人にはそれで満足できる度合いにまでいったと思うのです。そこに先生が付き合ってくれないと成り立たないことなので、そういうことがとても助かるというか、それがないとやれなかったと思いますね」と述べ、全盲の兄Fさんに対して単に通常児に合わせようとするのではなく、本人が満足できるレベル・内容をふまえながら常に対応してくれた教師の理解と努力を高く評価している。教師が障害を十分に把握し、本人が納得できるような教育支援を行うことは、統合環境における障害児の学習と発達を支える重要な視点である。

しかし障害児を含み約40人の子どもに教師一人で対応することは限界があり、教師負担もきわめて大きい。また「親の協力部分が大きく、また教育もその場その場で乗り切ってきた感があることから、もう少し安心して教育を受けられたら」という評価もあるように、教師一人の努力のみで対応するのではなく、「努力をこえる部分」をどうするのか、その具体的な支援方法の確立と教育条件の整備が課題である。

さらにFさんの「和光でなかなか難しい点は、視覚障害者としての情報が入ってこない」「視覚障害者として覚えていかななくてはならないことは、だいぶ遅れた」「盲学校より統合教育の方がいいとばかりはいえない」という言葉が端的に示しているように、共同教育においては障害児教育の専門性の不足も問題になっている。

なお障害児の存在がクラスの学習全体に与える影響について、次のような意見が出されている。すなわち「みんなはわからないことがいけないことだとは思っていない。むしろわからないことはクラス全員の問題となる。勉強はみんなでするってというのは全員が思っているから、障害があるからどうのってということじゃないわけです。障害があろうとなかろうと、わからない子はわからなくて、そのことが問題に取り上げられるわけだから。普通心配されるような、障害があって一人おいていかれてしまうということはない」(Aさん)、「(知的障害の)この子が分かるということはクラス全員が分かったということなので、それが利になる。先生はそのような考えだったのです。障害のある子を入れることは、決して障害のある子どものためにやっている訳ではない」(Eさん母親)。

このように障害児の学習のつまづきや困難に全員で戻って考え直すことは、多様な学習の回路を切り開き、より深い学びにつながる可能性を有していることを示しているが、しかしなお可能性の段階にとどまっている。聞き取りでも示されているように、軽度であっても知的障害や発達遅滞の子どもは、小学校から中学校・高校・大学への進学・移行において困難を抱えており、小学校で築いてきた力を次の段階へとつなげられないケースも少なくない。この問題の解決は和光の大きな課題である。

### 1.3 障害児の自己理解と障害理解

最後に障害児の自己理解・障害理解の問題を取り上げたい。

「自分が障害者であるということを、どのように意識したのかについてはっきりしないというか、謎とい

うか、そこが一番の問題」と考える脳性麻痺のBさんは、その原因の一端を、和光での友人はBさんの言語障害を理解しコミュニケーションがとれていたことであると分析し、それゆえに自己の障害認識はかなりあやふやであったと述べている。しかし障害者職業訓練センターに通い、初めて障害者の集団に入って同じような障害をもつ人と交流するなかで、肯定的・積極的な自己理解・障害理解へつながる経験をしたBさんは「そういうことってやっぱり和光のなかでは体験できない」と評価している。

上記のことに関わってBさんの友人でもあるCさんは次のように述べている。「養護学校を全部否定してはいけないよね。専門教育がそろっているわけで、大事な学校ですよ。一般の学校になじめる障害のレベルと、そうではないレベルの人がいるのですよ。そうではないレベルの人が入ってしまうと、お互いが苦労しちゃうかもしれないよね。周りももちろんだけど、本人も合わせよう合わせようと苦労してしまうかもしれない。それは逆に障害のある本人にとってかわいそうなことかもしれないよね」。

通常児の集団で過ごす統合教育の過程において、同じような障害をもつ仲間集団の保障とそれを通じた障害児の自己理解・障害理解の促進は大きな課題である。同じ障害をもつ仲間の出会いと交流は、障害児相互の理解・励まし合い・刺激となり、障害児の障害理解・受容とアイデンティティ形成にとって不可欠の機会であり、そのような機会を積極的に設けることは共同教育の重要な課題である。

さて今回の聞き取り調査では、①調査対象の年代、人数および障害種（全盲・脳性麻痺・ダウン症）が限られていたこと、②知的障害本人への聞き取りが不十分で工夫が必要であること、などの大きな問題が残っており、その面での改善とより詳細な卒業生調査は今後の課題としたい。

#### 【文献】

- 遠藤洋一（1990）共同教育の試み—障害児と教育の新たな課題—、『教育』第519号，pp.38-51
- 三上たみ（1995）障害児理解と教育的インテグレーションに関する研究—学校教育における福祉教育のあり方を中心に—，日本福祉大学大学院社会福祉学研究科修士論文。
- 三上たみ・高橋 智（1995）障害理解教育の展開と今後の課題—1970年代以降の障害児教育研究運動の議論を中心に—，『障害者問題研究』第23巻2号，pp.89-97
- 三上たみ・高橋 智（1996）障害理解と福祉教育実践の研究—大阪・富田林小学校の「発達・障害・障害者問題学習」実践を事例に—，『SNEジャーナル』第1巻1号，pp.96-125，特別なニーズ教育とインテグレーション学会。
- 三上たみ・高橋 智（1996）障害理解と福祉教育実践の方法論的検討—奈良教育大学附属中学校の交流・共同教育と「障害者問題学習」を事例に—，『障害者問題研究』第24巻3号，pp.108-118
- 高橋 智（1995）「人権としての福祉教育」の創造をめぐる理論問題—「福祉を学ぶ権利」の保障と「国民的福祉教養」の形成—，『障害者問題研究』第23巻2号，pp.4-11
- 和光小学校（1985）『共同教育 共に育ちあう「共同教育」を求めて—和光小学校の「共同教育」の歩みと実践—』
- 和光小学校（1991）『共に学び育て子どもたち—健常児と障害児の「共同教育」15年の歩み—』星林社。
- 和光中学校（1993）『中学生が変わる』星林社。